

・旧約聖書と新約聖書(福音書)の印象の違い

まず前提としてそれぞれに全く違う世界が広がっている。旧約聖書が書いているのは人間というものが言葉をもたなかったような大昔からはじまり、国ができたり、王が出てきたり、それなりの建築物も建ててというような人間のできることがどんどん増えていく世界。バビロン捕囚の少し前から暗いムードは漂うけれど、世界が新しく開けていくムードがあった。新約聖書では、もう世界は一定できてしまっている。社会の様々な前提や常識が確固としてできあがって、ある種の安定があるなかでイエスが登場している。そして、当時の常識では差別されていたような人々に教えをほどこしながら常識に立ち向かっていく。

その他、箇条書きで。

- ・完全に神が直接話すということがなくなっている。
- ・主が父と呼ばれるようになる。
- ・なんだかよく舟に乗る。
- ・2000年近く前に書かれた文章(読んでてちょっと忘れそうになる。)

マタイによる福音書

・大まかな構成、その他の福音書も似たような構成をとる

血縁(1)→イエスの来歴(2-4)→律法(5-7)→キリストの奇跡(8-9)→使徒への教え(10)→イエスの教え・動向、洗礼者ヨハネ殺される(11-16)→イエスの死と復活の予告(16)→イエスの教え・動向が続く(16-25)→イエス捕まる(26)→イエス死ぬ(27)→イエス復活(28)

平和ではなく剣を

こうして、自分の家族のものが敵となる。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。(略)自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。[マタ10.34-39]

「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」[マタ12.50]

イエスは、「預言者が敬われないのは、その故郷、家族の間だけである」と言い、人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。[マタ13.57-58]

神を父と呼ぶこともひとつの象徴だけど、家族観が変化している。血縁の家族ではなく、信仰でつながった人々が大事。

いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れてきたのでこれらの人々をいやされた。[マタ4.24]

徴税人や罪人も大勢やってきて、イエスや弟子たちと同席していた。(略)わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。[マタ9.9-13]

群衆がイエスを追っていくこと、病人(足が不自由、眼が見えない、体の不自由、口の聞けない、など)に関わることなど、日本の鎌倉仏教を思い出す。特に踊り念仏などの時宗。ヨハネの福音書では、女性の信仰者にも焦点があてられている。

「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」[マタ14.31]

「なぜ、わたしたちは悪霊を追い出せなかったのでしょうか」と言った。イエスは言われた。

「信仰が薄いからだ。」[マタ17.19-20]

「はっきり言うておく。あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば、いちじくの木に起こったようなことができるばかりでなく、この山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と、言ってもそのとおりになる。信じて祈るならば、求めるものは何でも得られる。」「[マタ21.21-22]

信じるということに強く実質的に意識をむけさせる。

「安息日に病気を治すのは、律法で許されていますか」と尋ねた。(略)「安息日に善いことをするのは許されている」[マタ12.10-12]

律法の再解釈。旧約聖書の解釈をめぐる壮大ななぞなぞのよう。たとえ話などよくわからないものもあり、それもなぞなぞのように思えてしまう。例えば、5つのパンと2匹の魚が5000人分の食料となりしかも余る[マタ14.13-]。これはどういうことなのか？

キリストはどうして未来を知っているはずなのに、未来は変えられないのか？中途半端に分かるのか、知っていても変えられないという運命論なのか？と途中で疑問に思った。

お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう。[マタ26.54]

旧約聖書に書いてあることを実現するため。書いてあることを忠実に実現することが大事。たまにたまたますごいことをした人が結果的にメシアになるのではなく、真面目に後を継いでいく。こういうところに(も)異教だったり、文化の差異を感じる。日本やったら、「そんなん書いてあることやっただけやん」とか言われそう。そのことに価値が置けないのではないか。

あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。[マタ28.19]

強烈。

マタイの福音書だけ読むと、「生き返ったあと、どうなるの・・・？」と疑問に思いうような終わり方。

マルコによる福音書

・マタイによる福音書とかなり似た雰囲気。

イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。[マコ6.34]

ちょっと想像して強烈だったので抜いてしまった。できればその羊にはなりたくない。

「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたいものはすべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を捧げるために来たのである。」「[マコ10.43-45]

何度も同じような表現は出てくるが考えの転換、上下の逆転を図ろうとしている。

最も重要な掟 [マコ12.28]

第1の掟『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』

第2の掟『隣人を自分のように愛しなさい。』

第一は信仰心として理解できるが、第2に隣人がくるのはどういうことだろうか。その心は？？

ルカによる福音書

・物語的。最初のあたりは読んで面白い。例えば、受胎告知、マリアとエリザベト。イエス誕生のあたり。

たとえ話やイエスの教えは神の国の掟などとして沢山出てくる。意味がわかりにくいものもあるが、宗教性がなくとも割となっとくできる、社会人としての掟と言い換えてもいいように思える挿話も結構ある。例えば以下のようなもの。

家と土台[ルカ6.48-49]

マルタとマリア[ルカ10.38-42]

「鋤に手をかけてから後ろを顧みる者は、神の国にふさわしくない」[ルカ9.62]

「はっきり言っておく。わたしのためまた福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑を捨てたものはだれでも、今この世で、迫害も受けるが、家、兄弟、姉妹、母、父、子供、畑も百倍受け、後の世では永遠の命を受ける。しかし、先にいる多くの者はが後になり、後にいる多くのものが先になる。」[マコ10.29-30]

以下の神の国の描写自体が今思う社会というものともかぶる。イエスは理想の社会を作ろうとしているとも言える。

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」[ルカ17.21]

イエスは自分の信念を貫くということ。精神の生の重要性を説いている。

あなたがたは親、兄弟、親族、友人にまで裏切られる。中には殺されるものもいる。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、あなたがたの髪の毛一本も決してなくなる。忍耐によって、あなたがたは命をかちとりなさい。[ルカ21.16-19]

十字架につけられる[ルカ23.26-43]

磔刑のシーンはけっこう感動的に読めてしまった。自分の信じることを信じ、助かるための嘘をつかない。死をもってしても精神が生きることを選ぶ。今の権力や常識以外にも正しいことがある、ということをおもうとしている。キリストにとって命とは単に肉体の生死を意味しない。

ヨハネによる福音書

・独特のオープニング。妙に言葉、書くということに意識的な福音書。

初めに言(ことば)があった。言は神とともにあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった、光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。[ヨハ1.1-5]

本書の目的

このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物には書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。[ヨハ20.30-31]

イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つを書くなれば、世界もそのかかれた書物を取めきれないであろう。[ヨハ21.25]

「本書の目的」というサブタイトルが結構衝撃。教科書、実用書みたいな感じ。旧約聖書から始まり読者を意識しているところが露骨に出ている初めての箇所。

『わたしはある』というのはどういうことか。例えば[ヨハ13.19]等で使われている。